

V28

早期喉頭癌に対する光線力学的療法の 予後

(東京医科大学耳鼻咽喉科) ○小槻泰三、
吉田知之、李 雅次、丸岡秀裕、
井上 斉、伊藤博之、鈴木 衛
(東京医科大学外科第1講座) 加藤治文

早期喉頭癌に対する hematoporphyrin (以下 HpD) と低エネルギーレーザーを用いた光線力学的療法 (以下 PDT) を 1982 年から臨床応用している。PDT の利点は他臓器への副作用がなく癌細胞のみを選択的に治療できることであるが、欠点として早期再発例が報告されている。そこで一次効果と長期観察例を再発予後の面から検討した。症例は T1 の早期喉頭癌 25 症例とし PDT は 1 治療期間に 2 回までとした。方法は HpD をレーザー照射 48 時間前に 2.0 mg/kg 静注し、局麻下にファイバースコープの吸引チャンネルからレーザー光線を照射した。光線照射量はパルス波 4 mJ/Puls (80Hz) 200 J/cm^2 を基本として照射をおこなった。一次治療として行った症例では 25 例中 23 例が CR となったが、CR の 23 例中 3 例にそれぞれ 21 カ月、7 カ月、6 カ月後に前連合部に再発した。さらに T1a の 1 例に観察中、声門下かなり離れた場所に扁平上皮癌が発生したが、いずれもその後の放射線根治照射にてコントロールされ原病死したものはなかった。PDT は癌細胞のみを選択的に治療できることが最大のメリットであるが、また治療による誘発癌が極めて少なく臓器毒性がないことも利点の 1 つである。PDT による副作用は軽度の光線過敏症以外みられず、重篤な合併症のある患者、超高齢者などにも安全に使用でき、さらに今までの治療との併用が可能であることは集学的治療の上からも望ましいものと思われる。また、この治療は引続きおこなわれる追加治療への影響がない点から、進行癌の姑息的治療や再発癌の局所治療としての可能性が示されている。

29

大腸癌指標としての糞便 α_2 -マクログロブリン測定 の意義

(内科学第四) ○五頭三秀、石塚大輔、日高道生
須藤一郎、川口 実、宮岡正明
斎藤利彦

【目的】現在主要な大腸癌スクリーニング法である免疫学的便潜血検査は、測定物質のヘモグロビン (Hb) が糞便中で比較的急速に抗原性の低下をきたすため、検体保存条件や期間により偽陰性を呈することが問題視されている。今回我々は、血中の巨大分子プロテアーゼインヒビターである α_2 -マクログロブリン (α_2 -M) に注目し、大腸癌検出能と保存安定性を、Hb、アルブミン (Alb)、 α_1 -アンチトリプシン (α_1 -AT) と比較検討した。

【対象と方法】①健常対照 33 症例 57 検体、大腸早期癌 18 症例 36 検体、進行癌 60 症例 121 検体の各糞便蛋白濃度と陽性率を比較した。②大腸癌糞便 39 検体を OC-ヘモディア緩衝液で 200 倍 (W/V) 希釈、混和後、 25°C 、および 37°C で加温し、各蛋白の経時的な陽性率の推移を比較した。

【結果】①対照、大腸早期癌、進行癌群における糞便濃度 (median: [25%, 75%]) ($\mu\text{g/g}$) は、Hb が 10.0: [10.0, 10.0]、30.8: [11.1, 80.4]、354.4: [93.3, 1498.5]、Alb が 10.0: [10.0, 10.0]、20.5: [10.0, 237.7]、74.7: [10.0, 777.0]、 α_1 -AT が 450.0: [245.6, 746.5]、934.5: [402.5, 1439.0]、1612.0: [715.0, 3075.5]、 α_2 -M が 0.6: [0.3, 1.1]、17.4: [10.2, 72.7]、99.1: [39.9, 393.3] であった。大腸癌陽性率は、Hb 81.5%、Alb 56.7%、 α_1 -AT 54.1%、 α_2 -M 86.6% で、Hb、 α_2 -M とともに Alb、 α_1 -AT に比べ有意に高かった ($P < 0.01$)。②緩衝液で希釈した患者糞便中において経時的に陰性化した検体の割合は、 37°C 、3 日後で Hb 7.7%、Alb 15.4%、 α_1 -AT 0%、 α_2 -M 0%、7 日後でそれぞれ 12.8%、23.1%、0%、2.6% であった。

【結論】糞便 α_2 -M は、大腸癌検出能と検体保存期間における安定性の両面に優れ、大腸癌スクリーニングへの応用が期待できる。